

## 三宅先生に贈る言葉

国際教育研究部長 熊本 哲也

三宅禎子教授は平成10年の岩手県立大学開学時より、県立大学の外国語教育のスペイン語教育に携わりお力を発揮していただきました。また、数多くのご業績とご功績を残されて本学の教育研究に多大なる貢献をいただきました。令和6年3月をもって定年ご退職されることとなりますが、まずは長年のお勤め心からの労いの言葉を贈りたいと思います。

三宅教授は昭和58年に筑波大学第三学群社会工学類をご卒業後、カリブ海に浮かぶアメリカ合衆国自治領であるプエルトリコにお住まいになり現地のプエルトリコ大学社会科学部に籍をおかれました。日本に帰国後は、京都外国語大学外国語学部の修士課程を修了されました。その後、岩手県立大学社会福祉学部に講師として赴任され、組織編制後に共通教育センター、高等教育推進センター助教授、さらに平成26年から教授になられて現在に至ります。

三宅先生は、平成10年の岩手県立大学開学時から25年の長きにわたり県大のスペイン語教育をご担当されてこられました。スペイン語の授業については、学生の間でもたいへん人気が高く多数の学生履修者を抱える授業であり、毎年、教室から履修者があふれていたようです。その実践的な授業は履修学生にいわゆるオーセンティックな会話教授法でスペイン語の日常会話を教授するものであり、それが学生の間でも評判ともなっておりました。

ご研究の分野では、アメリカ領自治区として世界でも珍しい統治形態をとっているプエルトリコをフィールドとし、その地におけるフェミニズム思想の形成や発展などに注目した研究を継続されております。さらには、アメリカ国内での人種・マイノリティー問題にも視点を広げ、フェミニズムと植民地性という課題を探求され、科研費取得も幾度かされております。「ジェンダー・イクォリティ」がSDGsや政治課題とされている昨今の日本にあって、三宅先生のご研究は文字通り注目されるべきものであると言っても過言ではないでしょう。

三宅先生のようなスペイン語教育やプエルトリコを始めヒスパニック地域文化の知識にたけた人材を失うことはたいへん残念なことであり、県大にとって、高等教育推進センターにとっても大いに損失となることは言うまでもないでしょう。これまでの労いに大いに感謝の言葉を贈らせていただきたいと存じます。

退職後は盛岡を離れ東京に落ち着くと伺いましたが、東京においてもご専門の分野でご活躍されることを切にお祈り申し上げます。